

▼Hさん

フクシマの後で

Ⅰ 破局の等価性を読んで

4月の読書会に参加して以来私の頭の中は等価性でいっぱいになりました。時折キーワードをみつけては「こういうことかな」と思えめぐるようになっていきます。

等価性とは今私たちが生きている社会構造そのものだと思う。

物質主義が人間と自然環境を破壊し 大都市にその富を集中させています
それはすごい暴力性をもっている。

大都市はまるで原子爆弾のように輝きを放ちまわりをとり囲み巨大な力を発する

原子力炉の炉心というものが私の等価性のイメージです

▼Sさん

=====
前半の「意味や方向の喪失としての破局」というイメージはとても印象に残った。読書会でいろいろな方の意見を聞きながらこの箇所を読んだことは大きな要因だと思う。後半のナンシーが示す「現在」とはどんなものか、についても新しいイメージを喚起することができて楽しかった。てつがくカフェも同じだが、著者の考えを理解しようとして読むときに、ひとつひとつの言葉に対して自分が持つ意味と相手との違いを意識しながら考えることが大切だと感じた。
=====

▼Mさん

『フクシマの後で』メモ

「破局の等価性」については、まだ明確に理解しきれていない。ただ、私は 10 章で安堵を覚えた。

文化も社会も産業も、もともとは目的があって行ってきたこと。そういうものもだんだん複雑化してきた現代、「量の質への変換」が図られ、自然と技術・目的と手段が渾沌としてきた。ここまで来ると、正直、個人でも団体でも国家でさえ手におえないのだろう。発展は「制御不能」であるという。この現状の中に「一般等価性」はある。原発にしても選挙にしても、だれの責任？とか、総意が国民一人一人の責任、とか、答えをあてがっても、なんとなく腑に落ちないのは、無理に一般等価性で説明しようとしているからかもしれない。その腑の落ちなさの突破口に 10 章の「通約不可能なもの」があればと思う。

それとは逆に、10 章の「通約不可能なもの」に読んだ時、一番初めに思いついたのは詩だった。資本主義の中で、「一般的等価性」の中で、詩の効用は説明しにくい。都合のいいことはいくらでも言えるが、やはり腑に落ちないのだ。この逆の立場からの腑の落ちなさも合わせてこれから考えてみたい。

「フクシマの後で」を読み、この大震災で思うこと

東日本大震災は、多くの命を奪い去って行った。宮城県、岩手県の沿岸部では地域によるバラツキがあるものの生活の見通しが立てられつつある。この逆境が却って住民同士の繋がりを強くしたと再認識している人達も多くいる。しかし、福島原発周辺部の復興は、困難を極めている。

津波被害を最小限に抑える術は、人間の知恵をもってすれば可能である。しかし、原発は100%の安全性が保証されない限り、とんでもないようなことが起こり、簡単にその危険を回避できず、数万年までも影響を及ぼしてしまう事故になることが、今回の震災ではっきり解った。

私たちは、戦後の貧しい生活から脱出するために、一途に働いてきた。これまで、政治のことは政治家に、行政のことは官僚に、地方自治のことは自治体に任せっぱなしにしてきた。よりよい生活を目標に、それを目指す技術に対しては、多少の危険性を指摘されても、その都度果たしてそれが人間の本来の生き方に合致しているかどうかを真剣に追求することなく、人間の知恵があればそのうち何でも解決出来るであろうとの驕りから、全面的に関係者等に任せてしまった。それが今回の福島原発事故で、破局を迎えてしまった。

私は、今回の原発事故を機会に、放射能と原子力発電についてのことを、少しばかり学んだが、その際、「もんじゅ」が如何に恐ろしいシステムであるかを知った。当時の関係者は疑問点を解決できなくても、プラントを先に造り、システムを動かしてしまえば、それと同時に並行的に問題点を解き明かしてゆけば必ず解決出来ると思っていたようだ。少なくとも既得権益をプラントとして先に造り、動かしながら考えると。しかし、稼働してゆくうちに予想もつかない事故が幾度として起こり、休止せざるを得なくなってしまった。幸い大事故には至らず休止したのでよかったが、今回の原発事故が起こるまでは、政治家や技術者がこれほどに恐ろしい冒険を犯しているとは思ってもみなかった。

今回の福島原発事故も同様の思想のもとに起きている。新しい技術が出来ても、それを十分こなせるようになるまでには、技術的、思想面等も充分考慮に入れて、検討し回答を導き出せる時間が必要だったのだ。福島原発についての危険性は、経営者や技術者も含め当事者には、わかっていながら、その事実をあくまで否認し「自分が地位を失うくらいなら世界は滅びよ」との狂気の姿がそこにはあった。人間は富や権力を手にするとこれほどまでに浅はかな存在になってしまうのだろうか。

アメリカのレーガン大統領の時代から新自由主義の思想が、日本にも根付くようになり、その後東西の冷戦が集結し、開発途上国も含め全世界がグローバル経済として組み込まれ、私達も全てが貨幣に換算される価値観での生活に陥ってしまった。以前は西欧社会と日

本だけの経済競争だったのが、全世界との競争となり、一段と激しさを増し、将来の不安は募り、それがまた人々を技術に頼るループにはめ込んでいった。しかし、もしフクシマの原発事故が無かったならば、この価値観は何か起きない限り変わることがなかっただろうし、技術だけがその価値観の元で途方もなく進行してくるので、自体はより深刻になっていたと思う。

よりよい生活を目指して働いた結果が、一転して見えない放射能の恐怖に怯え、家族の将来の癌の発症を避ける為の避難生活になってしまった。家族は分断され、自主避難者には公的な支援金もなく、経済的に困窮した生活を強いられている。私たちは、何が間違っていたのだろうか。それは、人間の感性を磨くことをおろそかにして、将来のことばかりに囚われていたからだろう。現在の自分のあるがままの姿を見つめ直し、人の持つ暴力的な性格を否定するのではなく認めた上で、今という時間を心ゆくまで生きてゆく。それには、川のせせらぎや小鳥のさえずりに耳を傾け、夕焼けの美しさに感動し、小さな野草にもその美しさを見つけるなど自然との触れ合う機会を多く持ち、心の充実を図ることが大切だろう。そうした自然や生き物への日常の感動があつてこそ、人の生命の尊厳さを理解出来て来るのであろう。

民主主義は、生をいただいている誰もが不幸にならないようにとの全員の思いの思想の下で、真に機能する。フクシマの後は、従来のように自分の生活向上を目指すのではなく、民主主義の名のもとに数の暴力を使うのではなく、社会全体と人間性にとって何が本当に大事なのかを、常に洞察してゆける明晰さが必要となる。より時間を必要としてくるが、多様な意見を吸収できる風土の形成が出来れば、自ずと技術の暴走は食い止めることが出来るだろう。

被災地の中からは、わずかながらこのような風土が芽生えつつあるように見える。北上地区では、歳をとっても生涯現役に徹し、余計な医療を求めず、寿命が来たらコロリと死んでゆく。地域のコミュニティは祭りなどを介してしっかりと、美しい海・山・川・田んぼの自然を生かし、福祉は受けるのではなく、助けるためのものとの生活スタイルが育ちつつある。また、大槌町では町の行政が機能出来なくなるほどの職員が亡くなったため、各地から自治体職員、各種団体・企業、ボランティア等の支援が入り、人口減少と高齢化により、衰退するだけとなっていた閉鎖的だった地域に、地元町民と外部との間で化学反応が起き、大きな変化が起きた。以前は、都会へ若者の流出してゆく流れに歯止めがかからなかったものが、各地からの支援者の中に、都会では味わえないその魅力に取り憑かれた者が逆に移住し始め、柔軟で外部の視点も受け入れたコミュニティ豊かな地域が醸成されつつある。

被災地の中に、こうした新しい価値観が築かれ、被災地に入った支援者やボランティアを通じてこの価値観が全国に徐々に波及してくることを願っている。

以上